

センシブルブル、センシティブ ケータイと脳と心の構造

携帯電話の電磁波は脳に悪影響を及ぼすのか？

医学的な証明はされていないとか、国によって見解が違うとか、産業界は認めたがらないとか、いろんな話がある。起動中のパソコンのそばでケータイが鳴るとパソコンの画面が乱れることは多くの人が経験しているので、何かしらケータイの電磁波は体に影響しているだろうと誰もが心配しているはずだ。

電磁波の影響かどうかは分からないが、ケータイやパソコンを使っていると記憶力が低下する。覚える意欲、忘れないでおこうという心が失せていく。まちががなく、頭がおバカになった。漢字も書けなくなるし、最近では文章もワープロなしでは書けなくなってしまった。このナビの文章も、ワープロが書いてくれるのであって、自分の実力で書けているとは思えないことがある。手書きで文章を書こうとすると、5分も集中力が続かない。筆が進まない。このごろでは、ワープロのように同音異義語を書くといった現象も起きる。

テレビで京都大学が実験用に飼育しているチンパンジーの驚くべき能力が紹介されていた。このチンパンジーは、タッチパネル上に乱雑かつ一度に表示される1から9までの数字を、昇順にすばやく指でタッチしていく。人間は、そんなに早く反応できないし、間違わずに昇順で全部タッチできる正答率は、人間の方がはるかに低らしい。人間も、進化の過程では同じような能力を持っていたに違いない。しかし、あるとき道具や言葉を身につけ、その代償として、このような能力を失ってしまったのだろう。ケータイやパソコンのおかげで（年齢のせい以上に）記憶力が落ちたであろうことを考えると、人間は、何かを得た代償に何かを失うということはあるそうだ。私の場合は、ケータイやパソコンという道具を獲得し、「記憶する意欲」を代償に、文章を大量生産することができるようになったのかもしれない。

先日、「子どもとケータイとコミュニケーション能力」を考えるワークショップを開いた。20名ほどが参加し、このナビ(50号)でも紹介した「さくらインコちゃんの携帯メール」のワークをやった。 <http://thothhouse.com/files/sendosan/sendo0050.pdf>

その中で、「今の子どもたちの脳、心の構造は、私たち大人のそれとは違うのではないか」というような話になった。子どもたちは、ケータイの代償に何か大事なものを失った、と。それは、例えばface to faceの対話力、協調性、自分の気持ちを表現する力などである、と世間一般に言われていることを議論した。それが本当かどうか分からないが、ありそうなことだ。しかし、そんなことをいくら話しても、本筋をはずしている気がしてならない。

「消えそうな三日月を、好きな人も、この同じ時間・別の場所で見上げていると思うだけでつながっていると感じる」というようなセンスは、大人も子どもも昔も今も同じだろう。宇多田ひかるの「オートマチック」の歌詞の中に、「・・・コンピュータスクリーンの中 チカチカしてる文字 手を当ててみるとI feel so warm」というのがある。痛々しいほどの感受性だが、手書きの便箋も液晶のスクリーンも、恋しさ・切なさを増すものであることに違いはない。

本筋は、ケータイ漬けになっている子どもたちが獲得したのに見出せるのではないか。子どもたちは、何か異常にセンシティブな力を高め、心がむき出しの虫歯の神経のようになり、それを保護しようとする。獲得した(させられた)センシティブさに耐えているようだ。